

分担研究報告書

分担研究者 井口 晶裕 北海道大学病院 小児科 助教

研究要旨

小児がんは H24 年 6 月に国のがん対策推進基本計画において重点項目のひとつと位置付けられ、それを受けて H25 年 2 月に全国 15 箇所の小児がん拠点病院が指定された。小児がん拠点病院は各地域ブロックにおける小児がん患者・家族に対する様々な支援を行う中心的な役割を期待されている。

北海道地域における小児がん医療提供体制のあり方、課題を明らかにするため、北海道の支援を得て、北海道地域における現状調査を行なった。

北海道においては 3 医育大学を中心とした連携があり、北海道大学病院、札幌医科大学病院、旭川医科大学病院、北海道がんセンター、コドモックル、札幌北楡病院の 6 施設で小児がん診療が行われている。また小児がん診療のための人材確保、地域病院との連携、患者負担の軽減、患者・家族支援などの課題が明らかとなった。

今回明らかとなった課題にひとつひとつ粘り強く取り組む必要があると考えられる。

A. 研究目的

小児がん拠点病院を軸とした小児がん医療提供体制の現状とあり方の課題について検討する。

B. 研究方法

小児がん拠点病院間の連携のあり方、および各地域ブロック内での連携のあり方を検討するために、北海道大学病院として今年度は北海道ブロックにおける小児がん患者の現状調査を行なうこととした。

具体的には北海道の協力を得て、北海道内の小児の診療を標榜する全ての病院、診療所にアンケートを送付し、(1)各施設の概要、(2)小児がん診療への人的配置、(3)小児がんに係る情報管理、連携、情報提供、(4)小児がん診療実態(診療症例数、連携体制など)、(5)患者・家族からの要望、などの点について調査を行なった。

C. 研究結果

詳細は北海道からの報告書である「本道における小児がん診療の実態等に関する調査結果」に記載されているが、以下に要点を記す。

回答率は全 903 施設のうち 254(28.1%)施設から得られた。北海道内の各地域の中核となる施設からはほぼ全施設から回答が得られた。

(1)各施設の概要

- i) 北海道内の小児の病床数は 1787 床
- ii) NICU を除く集中治療室は 32 病院に設置。
- iii) 放射線治療は 28 施設で可能

iv) 緩和ケアは 20 施設で行っている。

v) 患者・家族が長期滞在できる施設を有しているのは 22 施設。

vi) 院内学級は 10 施設に設置

vii) プレイルームは 20 施設に設置

(2) 小児がん診療への人的配置

) 医師の配置

- ・放射線治療の専門医師の配置は 18 施設
- ・化学療法の専門医師の配置は 16 施設
- ・緩和ケアの専門医師の配置は 26 施設
- ・精神症状の緩和専門医師の配置は 18 施設
- ・病理専門医師の配置は 27 施設

) コメディカルスタッフの配置

- ・放射線治療のための放射線技師の配置は 30 施設
- ・化学療法に携わる専門薬剤師の配置は 33 施設
- ・緩和ケアチームへの看護師の配置は 18 施設
- ・小児看護やがん看護に関する専門/認定看護師の配置は 4 施設
- ・細胞診断に関する者の配置は 27 施設
- ・チャイルドライフスペシャリスト、小児領域の臨床心理士、社会福祉士などの配置は 11 施設
- ・保育士の配置は 17 施設

(3) 小児がんに係る情報管理、連携、情報提供

- ・院内がん登録の実施は小児に特化している登録

を行なっている 2 施設を含め 28 施設で実施。

- ・地域がん登録は 33 施設で実施
- ・地域連携クリティカルパスの整備・活用状況整備 14 施設のうち活用しているのは 10 施設
- ・セカンドオピニオンの提示は 51 施設
- ・小児がん患者の相談支援は 14 施設で実施

(4) 小児がん診療実態

)2010 年 4 月～2013 年 3 月までに 3 年間の診療実績

・新規症例

407 症例(白血病 201、網膜芽腫 7、脳腫瘍 41、神経芽腫 44、悪性リンパ腫 42、肝芽腫 7、ウィルムス腫瘍 9、骨肉腫 12、その他 44 例)

・再発症例

50 症例(白血病 29、神経芽腫 3、その他 18 例)

新規症例も再発症例もそのほとんどが、北海道大学病院、札幌医科大学病院、旭川医科大学病院、北海道がんセンター、北海道立子ども総合医療療育センター(コドモックル)札幌北榆病院で診療されている。

・医療機関相互の連携体制

北海道内の施設のほぼすべてが北海道大学病院、札幌医科大学病院、旭川医科大学病院、北海道がんセンター、北海道立子ども総合医療療育センター(コドモックル)札幌北榆病院と連携している。

・他の医療機関と連携した小児がん診療のために必要と考えられること

小児がんに係る医療施設・設備の充実、小児がんに関わる医師の確保などを挙げた施設が多かった。

・小児がん診療に係る課題や今後のあり方について(自由記載)

専門医の確保(9 件)、スムーズな連携(9 件)、拠点病院等への集約(4 件)などの意見の他、患者の負担軽減、心理面および教育面のサポートの重要性を求める意見が多かった。

(5) 患者・家族からの要望・意見

安価な宿泊施設の増設や近隣ホテル宿泊費の補助等経済的援助、地元での医療完結のため常勤医の確保、院内学級の教員の増員、両親以外に入院中の患児を一時的にケアしてくれる人員サービス、母児入院中の家庭で残された家族へのサポート、

などが挙げられた。

D. 考察

北海道における現在の小児がん診療の実態が明らかになった。北海道においては 3 医育大学を中心とした連携があり、北海道大学病院、札幌医科大学病院、旭川医科大学病院、北海道がんセンター、コドモックル、札幌北榆病院の 6 施設で小児がん診療が行われていることが明らかとなった。

北海道内においては現状で一定の集約化が達成されているが、一方で広大な北海道全域から旭川地区を含む道央圏に患者が搬送されてくるため、地域の病院との連携、患者負担の軽減、転校・復学支援および高校生の教育などの患者・家族支援に課題があることも明らかとなった。

北海道大学病院は北海道唯一の小児がん拠点病院であり、北海道以外の他の地域ブロックの小児がん拠点病院のように複数の都府県をカバーしていないため北海道や札幌市などの行政と連携しやすい環境にある。最新の治療や集学的治療の提供はもちろんであるが、小児がん診療のための人材確保、地域の病院との連携、患者負担の軽減、転校・復学支援および患者教育の充実化など今回明らかとなった課題にひとつひとつ粘り強く取り組む必要があると考えられる。

E. 結論

北海道における小児がん診療の現状調査を行った。北海道においては 3 医育大学を中心とした連携があり、北海道大学病院、札幌医科大学病院、旭川医科大学病院、北海道がんセンター、コドモックル、札幌北榆病院の 6 施設で小児がん診療が行われている。また小児がん診療のための人材確保、地域病院との連携、患者負担の軽減、患者・家族支援などの課題が明らかとなった。

F. 研究発表

1. 論文発表

(1) 本道における小児がん診療の実態等に関する調査結果、2014 年 2 月、北海道保険福祉部健康安全局地域保健課

2. 学会発表

(1) Ohshima J, Sugiyama M, Terashita Y, Sato T,

Cho Y, Iguchi A, Ariga T. Risk factors and outcome of pulmonary complication of pediatric patients after hematopoietic stem cell transplantation. 40th Annual Meeting of the European Group for Blood and Marrow Transplantation (EBMT), April, 2014 (Milan, Italy)

(2) Iguchi A, Sugiyama M, Terashita Y, Ohshima J, Sato T, Cho Y, Kobayashi R, and Ariga T. GVHD prophylaxis using MTX decreases pre-engraftment syndrome and accelerates engraftment after CBT.

第 76 回日本血液学会学術集会、2014 年 10 月、大阪

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし